

看護用品の解説

胸帯は術後の創部を固定し、創部痛を軽減するために使われた。胸帯は一定の長さに切ったさらしを何枚か重ね、重なりがずれないように中央部分に縫い込みが入れられている。胸帯を巻くときは縫い込みのある部分を患者の背中中央に当てて、患者の体幹に近い内側からさらしを左右交互に巻き、最後は患者の胸の前で結んで創部を固定する。

看護用品にまつわるエピソード

本土から肺外科専門医を招聘して宮古でも手術が行えるようになった1960（昭和35）年頃、手術後の患者に看護用品の一つとして胸帯が必要となった。招聘医から術後に胸帯を使っていたと聞き、作り方を教わって作った。作っていたのは中央材料室の看護助手だったのか、病棟の看護婦だったのか記憶は定かでない。

（立津千代，2004）

解説

現在、胸帯は肺がんや乳がん、気胸などの胸部手術以外に消化器の腹部手術後においても使われている。肺合併症を予防するために喀痰を促される患者は、咳をすると創部痛が生じるのではないかと不安で、喀痰を抑制しがちである。胸帯を巻いて創部を固定すると、患者は咳によって生じる創部痛への不安が軽減され、看護者の励ましを受けながら咳をして痰を喀出できるようになる。また、歩行にも安心して応じることができ、胸帯は外科手術の必需品として未だに活用されている。現在その胸帯は、ポリエステルで天然ゴムが使われたマジック式ベルトになっており、さらしに比べ伸縮性があり、装着が簡便で一回で巻くことができるようになっている。

（名城一枝，2004）